

## 旅・いろいろ地球人

「遠くて近い村」 三島禎子（国立民族学博物館准教授）

(1) 冒険者の伝統 2018年12月1日刊行

セネガルやマリ、モーリタニアにまたがるセネガル川上流域にソニンケという人びとが古来、住んでいる。西アフリカ最古のものとして知られるガーナ王国の建国の民である。かれらは遠隔地交易を営み、離散と回帰を繰り返してきた。移動のかたちは変わったが、今日でも村と世界を行き来している。

男たちが旅に出るとき、人びとは「ハルノコイメ」といってまた会う日を願う。このことばには特別の思いが伴うらしく、涙を浮かべる人もいる。それほどに旅立ち是不確定なものだったのだろう。

しかし、村と世界の距離は遠いようで思いのほか近い。村にいながら、携帯電話で中国にいる同胞と商いの話をする。郵便局からは、定年まで勤めたフランスから年金を受け取る。メールなどなかった時代でも、手紙はフランスから4、5日で着いた。

故地を離れた人びとにとっても孤立感はない。世界の果てまで行っても、同じ民族の人間に会えば、どこかでつながっていることを確認できる。まして同郷人会があれば、村と同じ人間関係のなかで生活が続く。

かつてガーナ王国の王は領土内で産出する金を携えて、メッカ巡礼を果たした。そんな時代でも人びとの冒険心は地理上の距離に勝っていたのだろう。



乾季を迎えたセネガル川上流域 = 1993年、筆者撮影

(2) 送金システム 2018年12月8日刊行

移民が家族に送金したり、旅先で資金のやり繰りをしたりするとき、世界一速い決済方法がある。

ソニンケの人びとは、セネガルやマリ、モーリタニアの首都から陸路で数百キロ離れた内陸に故地がある。途中から舗装道路もない。銀行や郵便局は村から遠く、そこは都市機能というものがほとんどない場所である。

それにも関わらず、送金はまたたく間に行われる。故国にいる家族に現金が必要な場合、近くに住む知人が用立てする。両者の貸し借りは、海外にいる双方の家族が決済するのである。電話一本で済む。

旅先で、商品の買い付けに資金が必要な場合も、同じような信用貸しがおこなわれる。こちらは家族や知人という関係を越えて、商売上の契約といってもよい。

携帯電話を利用した送金も一般的になってきた。個人間の金銭のやり取りを電子化したこの方法は、銀行がないところで盛んにおこなわれている。

それでも現金を携えて移動しなければならないこともある。とくに移民が帰郷する際は、多くの知人からそれぞれの家族へ渡す現金を預かる。かれらは札束を巻き付けた腹をゆったりした貫頭衣で覆い、さりげなく税関の前を通過して飛行機に向かう。



国立民族学博物館に展示されているアフリカ各地の民族衣装 = 大阪府吹田市で 2015年、筆者撮影

(3) 砂漠と海を越えて 2018年12月15日刊行

「富、さもなくば遠くの墓」という諺を座右の銘にして、西アフリカのソニンケの男たちは冒険に出る。家族を養うという実質的な目的はあるが、それよりも立身出世を果たすという人生儀礼を通過することがもっとも重要である。

冒険に定石はない。今日、中国とアフリカ諸都市をつなぐ国際貿易を手がける大商人も、最初はたばこ一本の商いから始めた。商売の資金を作るためには、身体を使った労働も厭わない。20世紀後半からは労働移民として、さかんにフランスへ働きに出た。

一方、ヨーロッパには桃源郷があるという幻想も生まれた。近年、紛争や飢餓など生存の危機から、地中海を渡り、対岸のヨーロッパへ逃れようとする人びとが後を絶たない。アフリカ大陸からも数えきれない人びとが、難波の危険を顧みず船に乗る。運よく対岸にたどり着いても、ほとんどの人が保護されて強制送還となる。

この無謀な旅人のなかに、実はソニンケの男たちがいる。かれらの目的は純粹に冒険である。トラックを乗り継いでサハラ砂漠を北上し、先人たちの長距離交易の航跡をたどる。たとえヨーロッパへの渡航が成功しなくても、成功した揚げ句に強制送還となっても、かれらは大冒険の記憶とともに生きてゆく。



地方へ行く乗り合いバス = セネガルで 1996年、筆者撮影

(4) 離れた家族の存在 2018年12月22日刊行

西アフリカのソニンケの人びとは大家族で生活する。複数の世代にわたる父系の直系家族と傍系家族が、最年長の家長のもとに生計と寝食をともにするのである。最小単位は一組の夫婦と子供からなり、最大では100人を超える。親戚一同が一緒に暮らしているようなものだ。

しかし、働き手世代の男性たちはほとんど村にはいない。海外で働いたり、独立して貿易を営んだりして、家族に送金する。成功するまでは帰郷できない。その後、結婚しても家族の顔を見るのは数年に1度である。

海外にいる男同士は、同郷人会というつながりのなかで生きている。そこには家族間関係も、家族内関係もそのまま平行移動した社会がある。自分以外のソニンケがいないような地域に暮らしていても、同郷人会からの集金を免れることはできない。あらゆる海外在住者は故郷の開発のために貢献しなければならないからだ。

一方、故郷に残る家族にとって、とくに子どもたちには父親の不在は寂しいものである。しかしながら、子どもたちは、父親の「不在の存在感」の重みを感じながら、大家族のなかで成長してゆく。そこには、社会と家族にすさわしい人間になるために自らを律する倫理観があるように感じる。



30人分の食事=セネガルで1996年、筆者撮影